
霧の守り人

雲雀-tyongdari-

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

霧の守り人

【Nコード】

N28730

【作者名】

雲雀 - tyongdarri -

【あらすじ】

パラレルワールドを行き来することができる？霧？と呼ばれる組織の？技術？霧の守り人？であるりんは十五年ぶりの同窓会で自分たちを狙っている組織に会場を乗っ取られてしまう……

(前書き)

暴力的な部分があります。

ガン！！！！！

突然銃声が鳴り響いた。

その場が一瞬凍りつく……

次の瞬間には、悲鳴が上がり、辺りはパニックに陥った。人々は我先に何か所がある出口に向かって走り出した。

辺りは混乱していた。

突然、出口に向かって走っていた人達の波が急にすべてで止まった。

そして、恐怖の面持ちで広間の中心へと集められていく。

出口の外には男達が立っていた。

全部で十人ほどいるだろうか、ライフルを人々に向けていた。

「りん……」

桜が震える声で名前を呼ぶ。

りんは桜を見て、小さく微笑んだ。

「きっと大丈夫。必ず助かるから……」

男たちにライフルを突き付けられ、りと桜も広間の中央へと移動する。

すべての人達を広間の中央に集め、すべての扉が閉められた……

「久しぶりだね」

そこから中で飛び交っている言葉。

十五年ぶりに開かれた中学の同窓会。

大人になった同窓生達が、中学生に戻ったかのように、楽しそうに、懐かしそうにおしゃべりに花を咲かせている。

ホテルの一室を貸し切つての同窓会。

まばゆいばかりに輝いている大きなシャンデリアが天井からぶら下がっている。

辺りに響く、静かでゆつたりとした音楽は、和やかな空気を演出するのに一役かっていた。

りんも久しぶりに会った友達と、笑いあったりしながら、普段の忙しい日常から離れ、つかの間の休息を満喫していた。

そして、二次会になだれ込む……

中学生に戻り、思いっきり楽しい一日になるはずだった……

「……なんでこうなるかなあ」

りんは目を閉じて小さなため息をついた。

今、この部屋の空気を動かしているのは、さっきまで和やかな雰囲気を作りだしてくれていた、ゆつたりした音楽だけだった。

携帯電話が回収される。

(これで外との連絡の手段は無くなった……)

りんはそつと時間を確認した。

(定期連絡まで後一時間……)

りんはすべてを見透かすかのような鋭い視線で、辺りを見回した。同級生はみんな床に座らされている。

犯人はさつき確認した通り、十名。

みんなライフルを所持。

(……うかつに動けば、誰かが怪我をする……こっちは私一人……あつちは十人……最悪の場合は……やっぱりボスかはる君が気が付いてくれるのを待つしかない……)

「ねえ、りん」

横に座っていた桜が小声で話しかけてきた。

中学生時代、一番りんと仲が良かった女の子。泣き虫で、でも、とつても人のことを思っていてくれるりんの一番の親友。

今でこそ、連絡を取り合ったりはしてないものの、こうして会えばすぐ昔のように仲良くなれる、今でもりんとつては特別な存在だ。

「ここに、誰かお金持ちな人でもいるのかしら……」

「え？」

「だって、ほらドラマとかじゃ、こういう時、身代金なんかを要求するじゃない……そんな感じなのかなと……」

桜の声がしだいに小さくなり、最後にはほとんど聞き取れないほどだった。

りんはそんな桜を見て、小さく笑った。

「良かった……」

「え？」

「だってりん、とつても怖い顔、してたよ。私の知ってるりんじゃないみたいだった……」

おっとりしていて、あまり人氣がきかないように見える桜だが、意外としっかり見ていたことにりんは少し驚いた……

(人って成長するのね……)

……ちよつと失礼である……

「そう？」

そういいながら、りんは頬に手のひらを当てた。

「ほら、こんな経験ないからちよつといろいろ考えちゃって……」
リンは少し困ったように笑った。

「でも、桜がさつき言ったようなお金持ちはいないみたいだよ」
桜が恥ずかしそうに微笑んで下を向いた。

(それにして、こいつらの目的はなんなんだ……まさか……)

事態が一向に良くならないまま三十分が過ぎた。

犯人の男の一人が携帯を開く。

さつきから、この男が一人だけ、携帯を確認している。

(こいつがリーダーか……それにしてもさつきから携帯ばかり気にしてるな……それに外に向けて何の要求もしてないみたいだ……外も静かだ……やっぱりこいつらの目的は……)

りんがリーダー格の男に鋭い視線を投げかける。

(こいつらの組織は警察をの動きを止められるほどの力を持った組織ということか……)

その時、背後からりんに向けられた強い殺気を感じた。

勢いよく振り向きりん。

桜がその勢いにビックリして俯いていた顔を上げた。

すぐに振り返ったが、殺気はもうどこにもなかった……

(今の強い殺気、あいつらからじゃない……この部屋の外から……?)

りんは後ろを見回すが、殺気の正体は分からなかった……

ちよつと一息ついて、りんは前を向いた。

不意に目の前が暗くなった。

次の瞬間、

りんの体が後ろに吹き飛ばされた。

机にりんの体がぶつかり、派手な音をたてて倒れた……

女の子達からひめいが上がり、辺りは小さな空間が出来上がる。

「……っ……」

りんが呻く。

幸い寸前で避けたので綺麗に入りはしなかったが、口の中が少し切れた。

口角から血が流れている。

りんはその血を手の甲で拭きながら、立ち上がった。

りんを殴ったリーダー格の男がニヤリと笑う。

「お前が？霧の守り人？の一人、桜井りん、だな……」

りんが男を睨みつける。

「お前たちの目的は私……いや、？霧？の持っているこの世界の？技術？だな」

男は何も答えず、ライフルをりんに向けた。

辺りが息を飲む。

りんは動じず、ただただ男を睨んでいた。

場違いな柔らかい音楽が二人を包み込むように流れている。

りんが膝を少し曲げ、手を太ももの位置に動かした。

次の瞬間、

りんの体が男の目の前にあった。男の体が後ろに吹っ飛んでいく。

男が立っていた場所と同じ場所にりんが立っていた。手にはトン

ファが握られていた。

男は立ち上がる気配を見せなかった……

他の男達が、一斉にりにライフルを向けた。

時間が止まったような空気の中、カウントダウンのように流れる

ゆったりとした音楽。

りんの体が音も無く宙を舞う。

男達はライフルの引き金を引く間もなく意識を失っていった。

ゆったりとした音楽の中、りんのトンファが空気を切る。

男達が倒れる音だけが辺りに響いていた。

まるで宙を舞い踊るかのような優雅な姿にみんな目を奪われてい

た……

「そこまでよっ！」

宙を舞っていたりんの体が音も無く床に下り立つ。
その後を追うかのように、黒のストレートの髪が肩にフワッと治まる。

りんは声のしたほうに顔を向けた。

桜が立っていた。

同級生の喉にナイフを突き付けている。

「桜……どうして……あなたなの……？」

りんは信じられない表情を桜に向ける。

「ふふっ、驚くよねっ、私も驚いたもの」

桜は持ち前の無邪気な笑顔をりんに向ける。

「この計画、うちのボスが立てたんだけど、まさかりんとはね」
桜の視線が床で伸びている男達へと移る。

床に倒れているのは八人。残り二人は桜のそばへと移動している。

「こいつらが弱いのか……それともりんが強すぎるのか……どっちにしてもこれは計算外だわ」

言いながらため息をつく。

「桜……あなたはこの世界の桜じゃない……」

りんがさつきとは違って、険しい顔をしている。

桜はその言葉にニコツと笑う。

「そつだよ。私は第3のパラレルワールドから来たの。……この世界の桜はなんか情けないよね……」

「桜はどうしたの……」

「トイレで寝てるよ……さすがに自分には手は出さないよ……見たくない桜ではあったけど……」

同級生にナイフを突きつけたまま、同級生を床に座らせ、自分は近くの椅子に座った。

「あなたのボスはこの世界の？技術？を狙ってるんだね……そして

「霧？の消滅……」

「そう。確認されているパラレルワールドの中では最強と呼ばれる霧？ その？技術？を奪えばすべてのワールドを手中に治めたも同然。りんも分かっているよね、霧？が常に狙われていること」

「そんなことのためにこんなことを……一般の人を巻き込むなんて……」

感情を押し殺したりんの声が響く。

「一般の人を巻き込むなって……だってこうでもしないと？霧の守り人？は見つけられないじゃない……それに私は誰が巻き込まれようと関係ないわ」

桜がクスクス笑う。

しかしすぐにその笑みは消え、鋭い視線をりんに向けた。

「あんたはいつも私の邪魔をするのね……むかつく……」

その言葉と同時に後ろにいた男二人がりんの前に立つ。

桜の表情がすぐに無邪気な笑顔に戻る。

「もちろん抵抗すると……」

桜が同級生の首に当てていたナイフを強く押し当てる。

その刃が皮膚に触れ、血が滲んだ。

同級生は声にならない声を上げた。

男がりんの手足を縛り付け、トンファを奪った。

桜がりんの前に立つ。

男からトンファを貰い受け、そのままりんに向かって振り下ろした。

ノックもなく扉が開く。

「ボス、りんからの定期連絡がない……」

ボスに向かつて何とも、横柄なものの言い方だ。
後ろ手で扉を閉めながら入ってきた男。

藤 はるか。

黒のスーツを身に纏い、切れ長の鋭い目でボスを見る。

ボスが椅子から立つ。

「今日は確か、休日でしたよね？ プライベートで同窓会に行っているとか……」

ボスがはるかの前に立つ。

はるかとは違い童顔な可愛らしい顔。背は高くなく、はるかを見上げる形になっている。

「こちらから連絡はしてみましたか？」

「何回も。出なかったけどね……」

ボスが少し考える。

「同窓会会場はホテルでしたよね？ 最近世界の秩序が乱れてきています。仕事からみて何かあったのかもしれないね……はるか、お願いできますか……」

言い終わらないうちに、扉が開き、閉じた……

ボスがクスリと笑う。

「……いつも報告なんてしないで出ていくのに……りんのこととなると慎重すぎるほど慎重になるんですから……」

ボスが椅子に座り直し、悲しいような苦しいような表情を受かべ、大きな窓から外を見上げる。

「プライベートもゆっくりさせてあげられないなんて……すみません、りん。どうか無事で……」

真っ青な空に一羽の鳥が大きく羽ばたいていた。

りんが桜のそばに倒れている。

桜はゆったりした音楽の中、楽しそうに椅子に座り、りんを見下ろしていた。

「さて、？霧？の？技術？はどこにあるのかしらね……聞くところによると、小型化されて、身に着けることができるようになったとか……？」

桜がりんを観察する。

「それ、どこからの情報？ 本当に身に着けることができるくらい小型化されてると思う？ パラレルワールドを自由に行き来することがができるものだよ？」

「自由に行き来できるのは？霧？の？技術？だけよ。でも……ん、そうねえ」

桜は人差し指を立て、顎に当てる。桜がものを考えるときのいつもの癖だ……

(癖は一緒なんだ……あたりまえか……)

りんが自嘲気味な表情を浮かべる。

「それは、ボスがここに来れば分かること。情報は入ってるだろうから」

桜の瞳の奥が卑しく光る。

「でも、今のりん聞けば分かるのかなあ……それとも？霧？のボスが来れば教えてもらえるのかなあ？霧？のボスは争い事が嫌いなんだってね。だからこんな状況下だと、こっちが有利に働くんじゃないかなあ」

桜がコロコロと無邪気に笑う。

「それはどうかしら……」

桜の笑いがピタッと止まる。

「ボスはこのようい卑怯なことが一番嫌いな。それに……」

りんが一度言葉を切り、近くにあった椅子に寄りかかりながら倒れていた体を起こす。

「たとえば桜のところのボスが来たって、私たちには勝てないわ。さ

つき私を感じた殺気がそうなんでしょ。あれ以上の殺気を持つている人を私は知ってるわ」

言い終わるか終わらないうちに、一番大きな扉が大きな音を立てて粉々に砕け散った。

誇りと煙が舞う中から現れたのは……もちろん……

両手にトンファを持ち、体中から殺気という名の冷気を発している、はるかだった。

「はるくん……こわっ！」

りんが安堵の言葉を発したのと同時にまた、はるかの強い怒りを感じ取る。

「何してるの！ 撃ちなさい！」

桜があわてて男二人に命令する……が男は何もできないままその場に崩れ落ちた。

男達の背後にはいつの間にかはるかが立っていた。

はるかの瞳をまともに見た桜は恐怖でその場から動けない。

言葉すら発することができなかった。

はるかがゆっくりと桜に近づく。

「はるくん！」

はるかは桜を睨んだままゆっくりとした歩みを止める。

「何」

低く、冷たい声。

「私にやらせて……」

はるかは何も答えない……ただ、桜を鋭い眼光で睨みつけていた

……

「お願い！！ はるくん！ これは私がやらなきゃ」

はるかが目を閉じ、一息つく。

何も言わず、りんの手足を拘束していた紐を解いた。

はるかが立ち上がりそうになった時、りんがはるかの上着を掴んだ。

はるかは中腰のままりんの瞳を覗き込む形になる。

「ありがとう、はるくん」

りんははるかの瞳をまっすぐ見た。

はるかはりんの二の腕を持ち、体を起こした。

それにつられてりんの体も起き上がる。

(……俺ってりんに甘いよね……)

りんははるかに笑みを見せ、真顔になり桜に向かった。

桜は放心状態で床に座っていた。よほどはるかが怖かったらしい。

「桜」

りんが目線を桜に合わせる。

しばらく焦点の合わなかった桜だったが、我に返り勢いよく立ち上がった。

「りん！」

りんもゆっくり立ち上がる。しかし視線は外さなかった。

桜が自分のトンファを取り出し、りんに向かってくる。しかし桜のトンファはりんには届かなかった。

桜の体が崩れ落ちる。

りんの手にはいつの間にか自分のトンファが握られていた。

「りん、無事でよかった」

お屋敷へ戻ったりんをボスが優しくねぎらう。

「ボス！」

りんがボスに向かって小走りでかけていく。その後をはるかがゆつくりと歩く。

「すみません、りん。僕と知り合ったばかりに……僕が？守り人の印を渡したばかりに……こんな辛いことに合わせてしまいました

……すみません……りん」

ボスが頭を下げる。

「ボス、頭を上げて。私は後悔なんてしてないよ。ボスと会えたことも、？守り人？になったことも」

りんがニッコリ笑う。

「りん……しかし……」

「私はむしろ、ボスに感謝してる。ボスやみんなと一緒に働けることが、私にはとっても嬉しいことだから。それがどんなに危険でも……今回のこともボスが誤ることじゃないもの。パラレルワールドと関わっていく限りはいつでも起こりうることだもの。ちゃんとわかってる。だからボス、何にも気に病まないで」

「ありがとう、りん、今日はゆっくり休んで」

ボスは小さく笑った。

りんも小さな笑みを返した。

「はるか、りんのこと、よろしく願います。僕では逆効果なよ
うなので……」

「分かってるよ、ボス」

コンコン。

扉をたたく音がした。

「どうぞ」

はるかは読んでいた本を閉じて、ベッドから体を起こす。

扉が開き、リンが入ってくる。

「はるくん」

りんがはるかに向かって腕を伸ばす。

はるかがそれにこたえて、りんを自分の腕の中にスッポリ収めた。

りんの体が小刻みに震えていた。

「辛かったな……りん」

はるかはりんの髪を優しく撫でた……

りんはその夜、泣き疲れて眠るまで泣いた……

優しいはるかの腕の中で……

(後書き)

この話は書くのにずいぶん時間がかかってしまいました……

設定をいろいろ考えちゃったので、短編に入りきらないかと思っ
ちやいました。

なので、ちょっと設定として分かりにくいところもあったかもし
れませんが(^ | ^ ;)

いかがでしたでしょうか？

楽しんでいただけたなら幸いです(^ ^)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2873o/>

霧の守り人

2010年10月14日23時40分発行